

こそが詩を読むとこいひとなのかもしれない。

言葉と言葉のあいだにある不器用な連結が、プリズムを通過した光のように、見えている世界を屈折させる。そのように表された世界が、なめらかな発語<sup>ハルマ</sup>常套から遠くなるのは必然のことだが、同時に言葉はひ

に  
ずみを負い、それを跳ね返そうとして、独特のエネルギーを放射する。

この詩人はろう学校の教師であった。音声言語ではないろうの子供たちの言葉の「いきみやかき」について、現代詩文庫所収のインタビューで語っている。幾度読んでも胸を打たれる。  
(詩人)

### 都司昭著

、単に終末(後)のだけではない、「再を紡ぎ出す」として火の七日間「の負の思えない」「腐海」は、でひっそりと世界を見ていたのである。

「AKIRA」「新ゲリオン」「バトノル」「20世紀少年」ストピア(ユートピア)を描いた作品(未来)を描いた作品(ルチャールの影響の色真理教などは、自ら終末(ハルマゼド

## イタリア都市の空間人類学

陣内 秀信著

### 文庫

■「ファイマンさん 最後の授業」レナード・ムロディナウ著  
天才物理学者の晩年を研究所の同僚となった若き科学者が描く。「クオークの父」マレー・ゲルマンや、

### 新書

■「中国人の頭の中」青樹明子著  
中国人が頭の中でイメージするゆがんだ日本人像はどこから来るのか。正しい姿に戻さなければ真のコミュニケーションはあり得ない、と著者は訴える。中国のラジ才局で日本語番組のMCを務めた稀有な体験から養われた観察眼。量産される「抗日ドラマ」による洗脳にもかかわらず、日本好きが増える実態が理解できる。(新潮

ひも理論の構築に努めたジョン・シュワルツも登場、科学史の記録としても興味深い。何事も面白がることを重視したファイマンとの対話を経て、著者は後に脚本家に転じた。安平文子訳。(ちくま学芸文庫・1000円)

新書・700円)  
■「損したくないニッポン人」高橋秀実著  
行列を見ると「出遅れでは損」と思う、さまざまなポイントをためる……。日本人には「損したくない」習性があると感じた著者が、その理由を探る。節約が趣味の人と話し、経済や貨幣とは何かを追求。ついには「古事記」から「損」の感覚を想像する。「貧乏くさい」を自認する著者の、ユ一モラスな思考実験の旅だ。(講談社現代新書・800円)

イタリアの都市と聞いて思い浮かべるのは、運河と小道が複雑に入り組んだベネチアの風景や、石造りの中層のアパートに囲まれた中世以来の広場で夕食前のおしゃべりに興じる人々の姿だろうか。建築学者の著者はこうした個性派ぞろいの都市を1970年代初めから訪れ、建築や都市計画と、人々の暮らしとの結びつきに目を凝らしてきた。書名の「空間人類学」は、イタリアに関心を持ちながら東京の都市空間を比較研究する中で著者が編み出した言葉だという。都市を景観だけでなく、住民同士の付き合いや



イタリア都市の空間人類学 陣内秀信

## 広場の機能を古代から見る

祭礼、信仰などの関わりの中で捉える。そうした角度でイタリアの都市を眺めると、日本に比べ、人々が「家に住む」のではなく「町に住む」感覚を持っていることが分かったと著者は指摘する。  
市民が共有する空間が、イタリアの都市にはあふれている。その象徴が広場だ。ローマやシエナ、フィレンツェなど様々な都市を参照しつつ、著者は広場が人を都心に集める機能を古代からいかに蓄積してきたかを明らかにする。  
1970年代以降、郊外への拡大戦略を転換して都心の歴史地区の保存・再生を進めたポーニャの事例など、日本の都市づくりの参考になる例が豊富だ。成熟した都市が今後発展していくために必

# 経ヴェリタス

〈巻頭特集〉  
クルマ地殻変動、VW不正で拍車